

男湯

銭湯こそ集うところ

女湯

絵本や囲碁、趣味の教室

大阪市北区天神橋7で、半世紀近くにわたって地域住民に親しまれてきた銭湯が、住民の交流サロンとして生まれ変わった。生活困窮者向けの作業所が併設され、就労を目指す若者らが接客にあたる。番台やロッカーなど内装の雰囲気は営業当時のまま。運営団体は「もう一度、色々な人が集まる、ぬくもりのある場所にしたい」と期待している。

(黒川絵理)

大阪・天神橋7

交流サロンは「まちかどサロンほっぽ」。同区を拠点に、生活困窮者の就労支援活動をしている一般社団法人「大阪希望館」が、銭湯を半年間かけて改修し、今年4月にオープンさせた。

銭湯は「天神橋温泉」で、1958年に開業したが、経営者の病気で2003年に廃業。その後は大学の研究活動拠点に使われるなどしたが、4年前からイベント時に開放されるだけになっていた。

大阪希望館では、失業者や障害者に就労訓練として草刈りなどの軽作業を行ってもらってきた。その際、住民に礼を言われることにやりがいを感じ、失業者が多かったこ

番台、ロッカー 雰囲気そのまま

とから、「人と交流できる拠点が必要」と、天神橋温泉の所有者に提供を打診し、快諾された。

サロンは、女湯の脱衣所だった場所に設けた。番台に案内板を置き、壁のロッカーや鏡、看板などはそのまま。テーブルやいすを置き、絵本や囲碁セットなどをそろえた。定期的に手芸や菓子作りの教室も開く。

併設する作業所は、男湯の脱衣所だったスペースにあり、就労を目指す若者や障害者が、サロンを利用する住民にコピーや紅茶を提供する。また、粗大ゴミの処分や家具の運搬など、住民からの様々な依頼も有料で受け付けている。

オープンから3か月がたち、常連客も増えてきた。週

就労目指す人の作業所

大阪希望館 半年かけ改修

2回は訪れる近所の女性(76)は「静かで落ち着ける雰囲気が好き。銭湯が憩いの場所として復活し、うれしい」と話す。

精神的不調から働けなくなり、作業所に通う40歳代の男性は「サロンの接客で『ありがとう』と言われ、やっと居場所ができたと感じた」と話し、人と接する仕事を目指しているという。

大阪希望館の沖野充彦事務局長(54)は「住居や職を失った人は、孤立を感じている。住民とふれ合うことで、自立するきっかけになれば」と話している。

サロンの営業は祝日を除く月・土曜の午前10時～午後4時。利用料150円で、飲み物は無料。問い合わせは大阪希望館(06・6358・0705)へ。



営業当時の番台やロッカーが残る元銭湯の脱衣所にオープンした「まちかどサロンほっぽ」(大阪市北区で)